

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】岡田聡志

【所属】(助成決定時) 早稲田大学大学院文学研究科人文科学専攻教育学コース

【研究題目】 Institutional Research の国際的展開と変容

【研究の目的】

本研究は、近年日本の高等教育関係者を中心に関心が寄せられている米国に起源を持つ Institutional Research (IR) について、その国際的展開と各地域での IR 導入の歴史的背景や IR が担う機能といった米国以外の IR の実態を明らかにしようとするものである。

米国以外の IR の展開に注目し、異なった高等教育システムを持つ地域がいかにして IR を組織化・制度化していったのか、その地域での IR の活動は米国型の IR と比べてどの点で共通点を有し、どの点で相違するのかといったことを明らかにすることは、IR の導入が検討される日本の高等教育における IR のあり方と方向性を考察する上で重要な意味を持つ。また、IR の国際的展開を体系立てて理解することは先行研究で行われてきた事例研究を相互に結びつけ再解釈を可能にする基盤を提供するとともに、高等教育の国際的な動向の理解に供し得るものと考えられる。

【研究の内容・方法】

本研究では、米国以外の IR が波及した地域として、欧州とオーストラレーシア地域に注目する。IR の実践・研究を共有する組織を米国に次いで設立したのがこの両地域であり、米国の組織 AIR が 1965 年に設立したの次いで、欧州では EAIR が 1979 年に、オーストラレーシア地域では AAIR が 1988 年に活動を開始している。

本研究は、マクロレベルとミクロレベルの 2 段階に区分し実施された。まずマクロレベルの研究では EAIR 及び AAIR などの IR 関連組織・学会が発行してきた機関誌や Proceedings (発表要旨集録) 等の文献・資料の検討を中心に行った。次いでミクロレベルの研究では、欧州とオーストラレーシア地域における IR の先進的取り組みの事例研究として、オランダのアムステルダム大学と VSNU (大学協会)、ニュージーランドのオタゴ大学について訪問調査を実施した。

欧州の IR においてオランダは EAIR 設立当初より事務局が設置されるなど主導的役割を果たしてきたが、EAIR の活動は欧州の大学の歴史的構造 (公的資金への依存、政策志向等) とその広い地域性を反映し、米国の IR とは異なった形で展開する。その一方でオランダ国内では、1985 年の HOAK 文書以降 IR に対する関心を強めており、90 年代には全大学と VSNU (大学協会)、中央統計局による KU0-project によるデータベースの構築が行われた。1997 年にはオランダ国内の IR 関連組織である DAIR を設立している。このデータベースと VSNU に設置されている IR 担当チーム等との積極的な連携と貢献が個別機関の IR 活動の基盤となっている。オーストラレーシア地域では豪州を中心に高等教育の管理運営への関心は増大しつつも AAIR の活動は活発に行われているとは言えず別組織である ATEM の活動がその目的に供している。NZ の大学における IR 導入は個別大学の裁量による部分が多いが、資金配分システムの見直しと現下の財政状況の悪化もあり、IR の役割は益々大きくなっており、既存の高等教育センター等の連携を含め活発化しつつある。

【結論・考察】

IR が高等教育における国際的潮流の一つになっている理由には、競争的資金への移行と公的資金の減少といった高等教育の市場化と個別機関の自律性の拡大といった高等教育を取り巻く環境変化の共通性があるが、同じように大学セクターが少数の公立機関で形成される高等教育システムを有するオランダと NZ でも IR 導入のあり方は異なっている。特にオランダではセクター全体で協調・連携して IR を展開させている点に特徴が見られる。日本でも大学評価・学位授与機構で国立大学法人を中心としたデータベースの構築といった活動が実施されているが、セクターの 4 分の 3 以上を占める私立大学での IR 導入をどのように進めていくか、その人材をどのように養成・確保するのが課題となっている。この点でオランダのように中間団体が IR の導入に積極的な役割を果たしていくことが一つの可能性として示唆される。